

異文化コミュニケーション

NEWSLETTER

No. 16

May 1993

INTERCULTURAL COMMUNICATION INSTITUTE
KANDA UNIVERSITY OF INTERNATIONAL STUDIES
1-4-1, Wakaba, Mihama-ku, Chiba-shi, Chiba-ken, 261 Japan

神田外語大学・異文化コミュニケーション研究所
〒261 千葉市美浜区若葉 1-4-1
(Phone) 043-273-1233 (Fax) 043-272-1777

Information Processing in Intercultural Communication

Dr. William S. Howell

Emeritus Professor, University of Minnesota

We who study intercultural communication need to recognize certain facts about communication. I will list several fundamentals which are often overlooked, yet are necessary to an understanding of interpersonal communication.

The most basic activity in communication is the processing of information. Data are received by the brain where interpretation takes place, and any response results from the interpretation. How this is accomplished should be understood, for all communication depends upon it. Cultures differ in favored procedures of information processing, but the two hemispheres of the brain collaborate via the corpus callosum in a variety of ways determined neurologically rather than culturally. The study of how the two halves of the brain function is termed "split brain research."

Split brain research has revealed definite patterns of interpretation that make big differences in how we communicate. One, in which the left hemisphere dominates, is cognitive, conscious, analytic activity like figuring out your income tax or planning your schedule for tomorrow. Another pattern, in which the right hemisphere becomes active, is out-of-awareness information processing. Examples of this are going to sleep with a problem and waking up with the answer, or just knowing that a new acquaintance is not trustworthy.

Not all responses involve data processing. When a conclusion is a repetition of a previous response, little processing of information takes place. A firmly held political belief may make possible an almost immediate judgement produced without thought from habit.

Americans recognize cognitive processes and attempt to ignore out-of-awareness phenomena. They prefer quantitative information that can be expressed in numbers and possibly computerized. The result is excessive reliance upon detailed planning and failure to credit the importance of adjusting to circumstances on the spot. As General Von Mohlke noted, "Planning never survives contact with the enemy."

Japanese respect out-of-awareness intuitive processes and value non-numerical information and feelings. They are skilled in quantitative methods but keep them in their place. We might state the Japanese attitude that combines cognitive and intuitive approaches as "the job to be done is adjusting rather than anticipating."

All cultures employ the thoughtless, automated, habitual response--to the detriment of reasoned communication. The cross-cultural communicator should identify topic areas of prejudiced, rigid, predictable reactions common in groups encountered. We all have these automatic responses, and would be more effective if we minimized their role in our interactions.

Study of how the brain manages data is conducted in the West as though out-of-awareness information processing does not exist. However, testimonials of our greatest thinkers show that interpreting information out-of-awareness is often highly productive. In 1930, Albert Einstein said, "Every man knows that in his work he does best and accomplishes most when he has attained a proficiency that enables him to work intuitively--Perhaps we live best and do things best when we are not too conscious of how and why we do them."¹

Bertrand Russell some years later said, "The Whiteheads stayed with us at Fernhurst, and I explained my new ideas to him. Every evening the discussion ended with some difficulty and every morning I found that the difficulty of the previous

evening had solved itself while I slept. The time was one of intellectual intoxication.”²

Henry Mintzberg in his 1975 article “The Manager’s Job: Folklore and Fact”³ shows that successful managing results from spontaneous responses to situations rather than from thoughtful planning. Many creative writers rely upon out-of-awareness cerebral activities. For example, Kurt Vonnegut once told an interviewer, “I’ve written only 50 pages of my new book, so I don’t know what it is about yet.”⁴

What is the significance of all this to intercultural communication? First, the competent investigator will recognize the importance of information processing, and know its distinctive forms. Next, he or she should identify preferences for cognitive or out-of-awareness processing in a particular culture. Third, the temptation to use only Western research methods should be resisted. This is not easy, for American scholarly findings tend to be in the form of numbers. Finally, it is useful to locate in a particular cultural context areas in which non-processed, habitual responses predominate.

Viewing intercultural communication from the perspective of cerebral information processing yields fundamental hypotheses. More than other approaches it can adjust to the specific context.

Notes

1. M. K. Wisheart, “A Close Look at the World’s Greatest Thinkers.” *American Magazine*, June, 1930.
2. Jacob Brownowski, *The Origins of Knowledge and Imagination*.
3. Henry Mintzberg, “The Manager’s Job: Folklore and Fact,” *Harvard Business Review*, Oct. 22, 1987.
4. Kurt Vonnegut, *Minneapolis Star Tribune*, Oct. 27, 1988.

ホームステイにみる 対照的コミュニケーション

お茶の水女子大学助手 山本直美

「ホームステイ」ときくと、日本人の高校生・大学生が主として英語圏に赴くものを想像しがちであるが、一方で日本人家庭が外国人のホームステイを受け入れる事例も存在する。このような日本人ホストファミリーに対する調査・研究は今のところ数少ないが、私自身はこれを、日本人の異文化接触の問題を考察する際の有益な研

究対象の一つと考えている。

ところで、日本人の対人接触のあり方については、従来指摘されてきた点の一つに、日本人はウチとソトとを峻別する、というのがある。例えば土居（1971）によれば、日本人はウチにおいては甘え、相手と一体化しようとするが、ソトに対しては遠慮をはたらかせ、時には無遠慮・無関心の態度にも出るというのである。この指摘に従うと、日本人の対人態度はウチとソトでは全く異なるということになる。

さて、この指摘を念頭に置かならば、ホームステイの受け入れ（中でも長期の受け入れ）とは、日本人にとって極めて特異な、矛盾に満ちた状況のはずである。なぜならそれは、手塚（1991）も指摘する通り、本来ソトの者であるはずの外国人を、最もウチの世界である家庭に一足跳びに受け入れる状況だからである。換言すれば、互いに甘え合い一体化を求め合うはずのウチの世界に、そうした共通認識をもつとは期待できないソトの者を受け入れる状況なのである。このような状況において、日本人ホストファミリーは一体どのような対人態度をとるのだろうか。

私は、ホストファミリーへのインタビュー調査を行う中で、こうした状況下のホストファミリーの態度として、対照的な二つのケースを見いだした。それらはちょうど、ホール（1979）の言う「高コンテクスト」「低コンテクスト」のコミュニケーション形態をいみじくも代表するものと思われた。小稿ではこの二つのケースを取り上げ、その中に織り込ませた「高」「低」コンテクストの対照性を浮き彫りにしたいと考える。二ケースは、いずれも私大留学生のホストマザーの経験をもつ主婦、Mさん（51歳、受け入れ経験3回、いずれも3ヵ月程度の受け入れ）とNさん（58歳、受け入れ経験14回、そのほとんどが10ヵ月程度の受け入れ）の場合である。

周知のごとく、ホールの「高」「低」コンテクストの概念は、日本人と欧米人のコミュニケーション形態の対比においてしばしば引用されている。「高コンテクスト」とは、コミュニケーションの際、情報の大半が、言語コード上ではなくむしろコンテクスト（非言語コード、対人関係、物理的・社会的・心理的環境等）の中に組み込まれているコミュニケーションの形態のことであり、「低コンテクスト」とはこの逆である。互いに相手との心理的一体化を求め合うとされる日本人のウチのコミュニケーションの形態は、「高コンテクスト」の代表格であると言われる。一方、互いに自己の感情・欲求の独自性を確信するとされる欧米人のコミュニケーションでは、コンテクストによる情報の伝達は困難であり、そのコミュニケーション形態は、言語コードにより多く依存する「低コンテクスト」であると言われている。

それでは以下、M・Nの具体的事例を取り上げ、このコンテクストの概念に即した説明を試みてみよう。

〈Mの事例〉Mは、留学生pが、テレビ・洗濯機等の使用後にその電源を切ることを、退室時に消灯すること等を守らなかつた点をこぼして、次のように言う。「pには、

何でもない当たり前のことが守ってもらえなかったって
いうか…。」Mは、最初の数回はpに注意したものの、「そ
のうち言うのも嫌になってしまった」という。またMは、
別の留学生qの受け入れ時、qに特に手伝いを頼むこと
はなかったが、qがごくたまたま食器洗いをしてくれるの
を見て「いい感じ」を受けていた。しかしこうも付け加
える。「qは、こちらが忙しそうにしても、気をきかせ
て洗っというてくれるってことはなかったですね。こ
ちらから『洗っというてくれない?』とは、なかなか言
いにくいでしょ?」

〈Nの事例〉Nは、留学生の受け入れを始める前に、
例年その留学生を来訪させて部屋を見せ、次の点を申し
渡す。家賃の額。家賃外の費用(電気・水道・電話代)
はとらないが、代わりに無駄な電話・深夜の電話は厳禁
とのこと。Nの二人の娘と同様、三日に一度は夕食後の
食器洗いの役割があること、等である。あるときNは、
茶碗に米粒を残す留学生rを注意し、なお納得しないr
に次のように言った。「私が育ったのは食べ物のない時代
だったしね。時代が変わっても、私の気持ちの上では食
べ物を粗末にする今の若者はとても許せないからね、そ
れは我が家ではできないの。」このNの説明によってrは
了解し、その後二度と茶碗に米粒を残すことはなかった。

Mの事例で、「何でもない当たり前のこと」という発言
は、Mが、自身の求めるやり方を、留学生も共有してい
るはずの「普遍的コンテクスト」の一部と意識してい
ることを示している。Mは、このようにコンテクストの共
有を当然のことと考えるがゆえに、留学生に言語化を行
うというよりは、むしろコンテクストの通用しないこと
に嫌気を感じては言語化を放棄してしまっているのだ
である。またMは、当然のこととして留学生に察し合いを期
待している。言語化を控えるMの態度は留学生に対する
Mの察しであるが、一方コンテクストを共有しない留
学生からはお返しの察しが得られず、Mは不満を募らせ
るのである。

Nの事例では、Nが自分自身の家庭内のやり方を個別
的な「我が家のルール」と認識した上で、そのルールを
留学生に明示している。すなわちNは、受け入れに際し
て、留学生との間にコンテクストの共有を前提として
はいないのである。またNは、必要に応じてルールの制定
の理由を説明し、留学生を説得するという行動にも出
ている。

Mは、ホームステイの受け入れ時、留学生をコンテ
クトを共有する「ウチの者」とみなしているが、そのコ
ンテクストが通用しないと感じると、(言語化の放棄に見
られたように、)留学生を「ソトの者」として無視の領域
に置いている。すなわちMは、ホームステイの受け入れ
の時、留学生のもつ「異文化」に気付かないでいるか、
あるいは気付いてもそれを相手の個人的性格に帰結させ
るか、それと向き合おうとしないかで、いずれにしても、
真の意味で「異文化」と交流ないしは交渉することはない
のである。これに対してNは、おそらくそれまでの長
年にわたるホームステイを受け入れた苦い経験から学ん

だのであろうが、常に自身と異質の他者の存在を想定し
ている。そして、言語コードのやりとりを通じて、相手
の「異文化」に対面し得るのである。

小稿の前半で述べたように、日本人のコミュニケーション
形態は「高コンテクスト」の代表格であると言われて
いる。そうした中で、ここで挙げたNの事例は、未だそ
の数は少ないものの、今後の日本人が異文化との出会い
で有効となりうるコミュニケーション形態を示唆してい
るように思われる。

引用文献

- ・土居健郎『「甘え」の構造』弘文堂、1971年。
- ・手塚千鶴子「ホームステイと異文化コミュニケーション」(『異文化間教育5』)異文化間教育学会、1991年。
- ・ホール、エドワード(岩田慶治・谷 泰訳)『文化を超えて』TBSブリタニカ、1979年。

研究所からのお知らせ

紀要『異文化コミュニケーション研究』第5号発刊

『異文化コミュニケーション研究』第5号が6月に刊
行されます。収録論文は以下のとおりです。ご希望の方
には実費でおわけしていますので、相当額分の切手同封
の上、お申し込み下さい。

紀要 一部 710円(郵送料込)
抜刷 論文一点 250円()

収録論文一覧

心と歴史

- 一言語的コミュニケーションと
歴史の方向性一 沢田允茂
- 『文明論之概略』における
説得コミュニケーションの構造 平井一弘
- 沖縄文化の記述と解釈
一“異文化”の理解をめぐる一考察一 高桑史子
- “決め方”の文化摩擦
一異文化コミュニケーション研究への
一試論一 久米昭元

異文化コミュニケーション講演会

日 時：1993年6月11日(金)

18:30~20:30(予定)

講 師：星野 命(北陸学院短期大学学長)

テーマ：異文化間教育と対人コミュニケーション

場 所：神田外語学院(東京)

問い合わせ先：当研究所

幕張夏期セミナー'93開催

(9月11日~13日)

当研究所が主催するワークショップも今年で3回目を
迎えます。1993年度セミナーは、第1回目からの継続テ

一マ、「大学における異文化コミュニケーション論の教育と方法」の下で、これまでのまとめとしての性格をもたせ、下記の内容で行う予定です。

Panel Discussion:

「異文化コミュニケーション教育への展望」

Session A: 林 吉郎(青山学院大学教授)

「異文化ビジネス論」

Session B: 武市 英雄(上智大学教授)

「国際コミュニケーション論」

Session C: 樋口 勝也(桜の聖母女子短期大学教授)

「非言語コミュニケーション論」

Lecture: Dr. Sheila Ramsey (神田外語大学客員教員)

“Strategies in Teaching Intercultural Communication”

詳細は当研究所までお問い合わせ下さい。

研究科新設 (1993年 4月)

異文化コミュニケーションに関連のある大学院研究科は以下の通りです。

東北大学大学院国際文化研究科

国際文化交流論専攻

(異文化間教育論、言語コミュニケーション論)

東京大学大学院総合文化研究科

言語情報科学専攻

(国際コミュニケーション講座)

名古屋大学大学院国際開発研究科

国際コミュニケーション専攻

寄贈図書一覧

武市英雄他『マス・コミュニケーション概論』学陽書房、1974年。

ベイ、アリフィン(奥 源造編訳)『インドネシアのこころ』めこん、1975年。

武市英雄『日米新聞史話』福武書店、1984年。

加藤恭子・武市英雄『アメリカ人の文化と常識』ジャパンタイムズ、1985年。

朴 俊熙『拡大志向の日本人』東信堂、1986年。

ベイ、アリフィン(小林路義編)『アジア太平洋の時代』中央公論社、1987年。

Hayashi, Kichiro., ed. *The U.S.-Japanese Economic Relationship: Can It Be Improved?* New York: New York UP, 1989.

Nishiyama, Kazuo. *Strategies of Marketing to Japanese Visitors*. Needham Heights, MA: Ginn Press, 1989.

ボイド、アンドリュース『世界紛争地図』創元社、1990年。

土橋久夫編著『海外職業訓練ハンドブック パキスタン』海外職業訓練協会、1990年。

亀井俊介編『パチンコけんけん学々』善本社、1990年。

上岡一嘉『異文化に学ぶ』東京書籍、1990年。

板坂 元『異文化見聞録 1』中野書店、1990年。

板坂 元『異文化見聞録 2』中野書店、1990年。

サイード、E. W. 『イスラム報道』みすず書房、1990年。

Sugiyama, Yasushi. *Between Understanding and Misunderstanding: Problems and Prospects for International Cultural Exchange*. New York: Greenwood Press, 1990.

Casmir, Fred L., ed. *Communication in Development*. Norwood, NJ: Ablex Publishing Co., 1991.

フェザー、ジョン・箕輪成男『イギリス出版史』玉川大学出版部、1991年。

管 輝男『The Man Yo-shu』中教出版、1991年。

松本 茂『発言』する英語』SSコミュニケーションズ、1991年。

本山美彦『豊かな国、貧しい国』岩波書店、1991年。

トフラール、アルビン(徳山二郎訳)『パワーシフト』フジテレビ出版、1991年。

樋口勝也『日本人の人間関係』淡交社、1992年。

星野 命『クロスカルチャ思考への招待』読売新聞社、1992年。

ハウエル、ウィリアム・久米昭元『感性のコミュニケーション』大修館書店、1992年。

倉地曉美『対話からの異文化理解』勁草書房、1992年。

Nakao, Takeo. *The Japanese Mind*. Tokyo:

Booklink International Co., Ltd., 1992.

松本 茂『CNNキーワード』朝日出版、1992年。

「南」委員会(室 靖訳)『「南」への挑戦』国際ジャーナル社、1992年。

岡部朗一『政治コミュニケーション』有斐閣、1992年。

大橋敏子他『外国人留学生とのコミュニケーションハンドブック』アルク、1992年。

Stevenson, Toney and June Lennie., eds. *Australia's Communication Futures*. Queensland: The Communication Center, Queensland University of Technology, 1992.

高杉忠明『アメリカの時代』芦書房、1992年。

渡辺文夫・高橋順一『地球時代をどう捉えるか』ナカニシヤ出版、1992年。

渡辺文夫編『異文化間コンフリクト・マネジメント』(『時代のエスプリ vol. 308』)至文堂、1993年。

箕輪成男『「国際コミュニケーション」としての出版』日本エディタースクール出版部、1993年。

当研究所に寄贈して頂いた図書の一部を年代順にまとめました。上記図書の他に多くの図書、論文、紀要、雑誌、ビデオ等を送付頂いております。スペースの都合で掲載できませんが、当紙面を借りて心より御礼申し上げます。

Editor's Note

We are pleased to receive an article from Dr. William S. Howell, an American pioneer in intercultural communication studies. Your own letters and contributions are most welcome, as we hope this newsletter will serve as a forum for discussion on culture and communication issues.